

朝日遺跡出土の外来系土器について— 2 —

宮 腰 健 司

I

外来系土器の中には、①直接搬入されたものと、②それらをモデルとして在地で製作されたものがあり、②の受容の仕方としては、④新出のものとして在来の器種組成の中に組み入れられたり取って変わったりして、部分的に変容しながらも在地化してしまうもの、⑤模倣はされるが器種組成には組み入れられないもの、⑥部分的なところでの模倣が行なわれ、それが器種組成の中に組み入れられるもの、⑦部分的なところでの模倣が行なわれるが、器種組成の中には組み入れられないものがある。ただそれらの区分は、— 1 —でも述べられていたとおり、明確にはされておらず、多くの問題が含まれている。また、朝日遺跡が位置する尾張地方においては、外来系土器が進出した次の段階には在地化するという現象が幾度となく生じており、後期にいたると縄文時代又は弥生時代前期からの型的な連続性を保つ純粋な意味での在地土器はみられなくなってしまい、ますます外来系土器の抽出を困難・複雑なものにしている。今回この文においては、朝日遺跡で出土し、昭和62年度までの整理中にピックアップされた後期以降土器のうち、比較的選出しやすい①、②—⑤のみを取り上げることとした。また、外来系の区別は土器型式の上での区分であり、胎土については深く言及し得ていない。

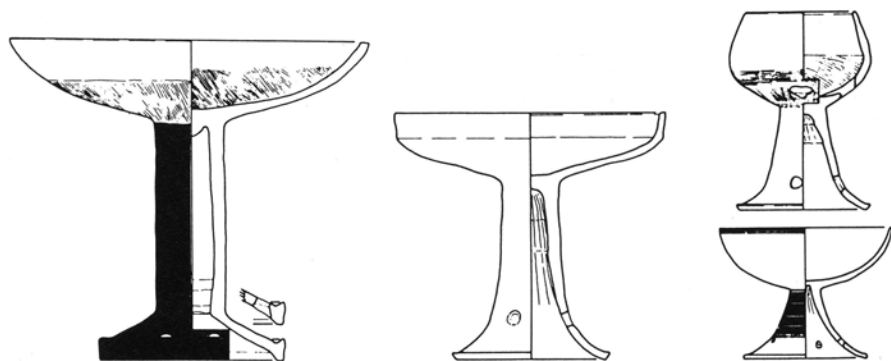
II

現在朝日遺跡で出土している外来系土器を大きく、1—畿内系土器、2—近江系土器、3—北陸・山陰系土器、4—伊勢湾東部系土器の4地域に分ける。また時期区分は弥生時代をⅠ～Ⅵ期に分け、元屋敷古期をⅦ期、中期をⅧ期として記述していきたい。

1. 畿内系

Ⅴ期—畿内系の影響が大きく現れるのがⅤ期前半であり、Ⅳ期にみられた大規模な波及の第二波といえる。高杯・長頸壺・器台が大きく変化する器種としてあげられ、搬入土器と思われるものも何点か出土している。そしてそれらの土器はⅤ期後半には在地化し、外来系土器としては扱えなくなってしまい、東海地方に広く分布していく。

Ⅵ期—Ⅵ期後半には、南居住域の内環濠より第1図1のタタキが施されている甕や、第1図2の高杯が出土しているが、量的には極僅かであり、Ⅴ期までの圧倒的な影響はみられなくなる。またこれらは搬入土器であると思われる。



第1図 SX162出土土器(1:6)

VIII期—小型精製土器を始め、畿内系の影響が再び強くなり、柳ヶ坪型壺と関連づけられる二重口縁壺（第2図1）の出現や、布留式甕（第2図2）が出土している。

2. 近江系

尾張に隣接しており、後期以降の当地に多大な影響をもってくる地域として重要な位置を占めているものと考えられる。

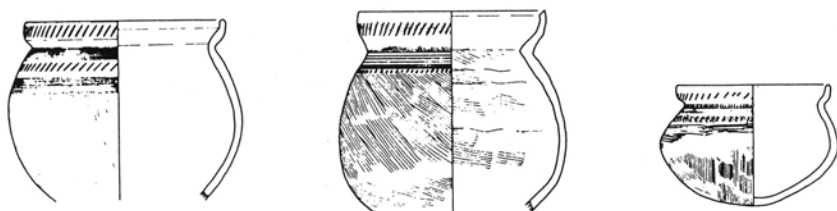
V期—近江型の受口鉢がV期に現われてくることは確実であるが、それが前半になるのか後半になるのかは不明である。

VI期—近江型の受口甕がこの時期に尾張に現われ、S字状口縁甕の成立を始め大きな影響を与えたものと考えられるが、VI期のどの時期に流入するのかについては不明である。

3. 北陸・山陰系

本来ならば北陸系と山陰系とに分けなければならないところであるが、区別し得ていないので、ここではとりあえず同一地域として取扱う。

VI期—南居住域の内環濠より出土した台付壺の台（第1図4・5）は、有段をなす台部口縁に擬凹線が廻り、同じ形態の口縁部をもつ壺が上部に付くものと思われる。甕（第1図3）は倒卵形の体部をもち、口縁外面に粘土を貼付し有段口縁状の形状を作り出している。



第2図 朝日遺跡出土の近江系土器(1:6)

Ⅶ～Ⅷ期—外反する杯部をもつ高坏（第2図3）や、有段口縁をもち球形の体部をなす甕（第2図4）があり、双方とも搬入土器かと思われる。

3. 伊勢湾東部系

漠然とした地域区分であるが、遠江を中心とした地域を設定し、これに三河地域も加えたい。

Ⅵ期—第1図の6・7は施文方法などに東海東部系の影響を受けているもので、61L区SZ01より出土している。

Ⅶ～Ⅷ期—下体部が明確に屈折したり、口縁部が折り返されるような壺（第2図5・6・7）をこの地域のものとしてあげたい。

III

次に、弥生時代後期以降の朝日遺跡を遺構の推移からたどるとどのような変遷を示すかみてみたい。

V期—前半にはⅣ期以来の不安定さが続いており、西及び北墓域に方形周溝墓が築かれるのみである。

後半には、北・南の居住域に環濠が廻らされ、その掘削に前半期の方形周溝墓の溝を利用したり、切断したりしている。当初は1条だけで内側のものより作られており、V期末かⅥ期に外側のものが付加されたと考えられる。

Ⅵ期—Ⅵ期前半については不明な点が多く、良好な資料については未検出である。

後半には、北居住域に2条及至5条、南居住域には2条の環濠が廻らされる。南居住域では環濠によって突出部や交錯する出入口が作られており、強固な防禦体制が敷かれていたことが考えられる。しかしこの体制も、Ⅵ期の終りには、環濠への土器の大量廃棄という現象をもって途絶し、61L区SZ01にみられるように、環濠内にも造墓が行なわれ、環濠の機能停止・集落の縮小を窺わせる。また、弥生時代中期には墓域として用いられていた東微高地に、Ⅵ期の土器が廃棄された溝や井戸状遺構が検出されており、南・北居住域の縮小に伴った集落の分散と考えてよいであろう。

Ⅶ～Ⅷ期—北居住域は不明であるが、南居住域での生活の痕跡はほとんどみられなくなり、Ⅵ期後半に分散した東微高地上に生活の場が続けて営まれたと思われる。また、弥生時代中期の大型方形周溝墓の周溝が窪地状に残っている場所に土器廃棄を行ったり、周溝を繋げるにより溝を作ったりしている。

以上朝日遺跡の弥生時代後期以降の画期をまとめると下記のようなになる。

1. V期後半の環濠掘削
2. Ⅵ期後半の環濠への土器廃棄、集落の縮小・分散化

IV

いままでに外来系土器の推移と遺跡の変遷を述べたが、以下この両者がどのように関連して動いていったか、推定されるところを記してみたい。

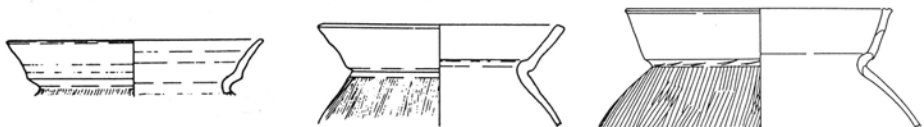
○SX162より出土した一群に代表される畿内系土器の影響がみられ始めるのはⅤ期前半であり、当初は搬入土器のかたちで朝日遺跡に出現し、その後Ⅴ期後半の土器群を決定づけるのに多大な力をもっていたと考えられる。このことは、Ⅵ期後半に再度構築される“環濠集落”に対峙するものが畿内系土器をもつ集団以外であった可能性を示唆しているものと思われる。

○次に外来系土器がみられるのはⅥ期後半である。ただしこれらの一群はⅤ期前半のような衝撃を朝日遺跡の土器には与えておらず、畿内系土器にみられるような搬入土器としてとか、北陸・山陰系土器にみられる折衷土器として採用されるだけで、唯一器種組成の中に影響を与えたものは近江系土器である。このことはⅥ期後半の土器型式が外来系土器の影響を受けず在地の中より生まれてきたことを示しており、その分布から伊勢湾や遠江までの地域に多大な影響力をもっていたことを窺わせている。この在地の力や一体化を作り出したものは、環濠を用いた紛争であり、その紛争後Ⅵ期後半土器群が出現してくるものと思われる。逆に言えば、Ⅵ期前半は紛争が生じている混沌の時期とも言える。

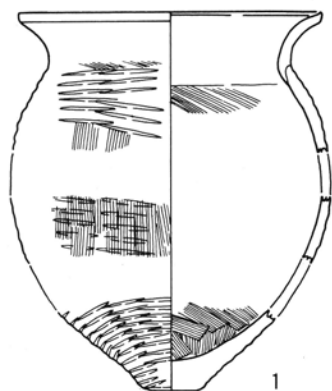
また、Ⅵ期後半の外来系土器は、環濠や周溝墓の周溝への大量廃棄の中より出土しているが、このことは大量廃棄の原因となったものの中に土器の交流によって示される外的な要因があった可能性を示唆しており、この土器交流にみられる広範囲な動向が次のS字状口縁甕B類に代表されるⅦ期に繋がっていくと考えられる。つまり、Ⅵ期後半という時期を生み出した要因と、Ⅶ期を生み出した要因とは質的に相違するものであったことが考えられるのである。

○Ⅷ期には、畿内系土器の二重口縁壺や小型精製土器、及びその影響を受けた柳ヶ坪型土器や、北陸・山陰系土器の影響を受けた有段口縁とS字状口縁甕の体部との折衷甕等にみられるように、土器の交流が盛んになり、大きな画期のあったことが窺われる。

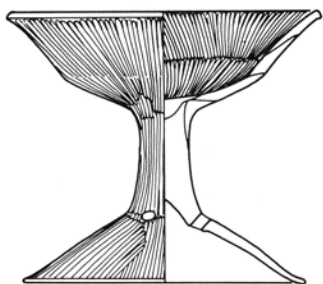
以上、朝日遺跡の後期以降の外来系土器についてまとまりのない記述をしてきた。またこれらのものは整理中であり、点数も少いことから、様相が変わることも多々考えられるし、詳細な器種分類やその消長を追うことによりもっと明確な外来系土器の区分をしなければならない。今後の検討課題として報告書を待ちたいと思う。(つづく)



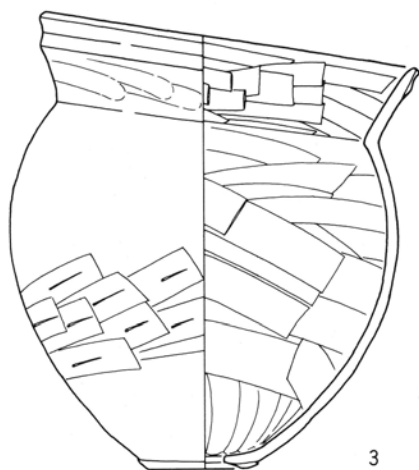
第3図 朝日遺跡出土の有段口縁をもつ折衷甕(1:6)



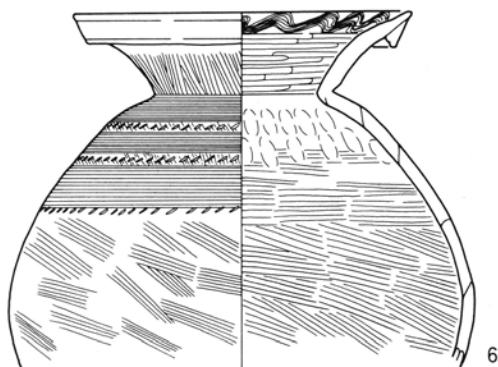
1



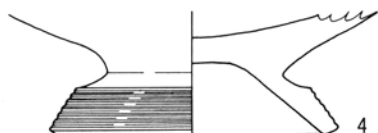
2



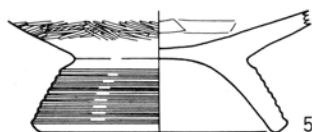
3



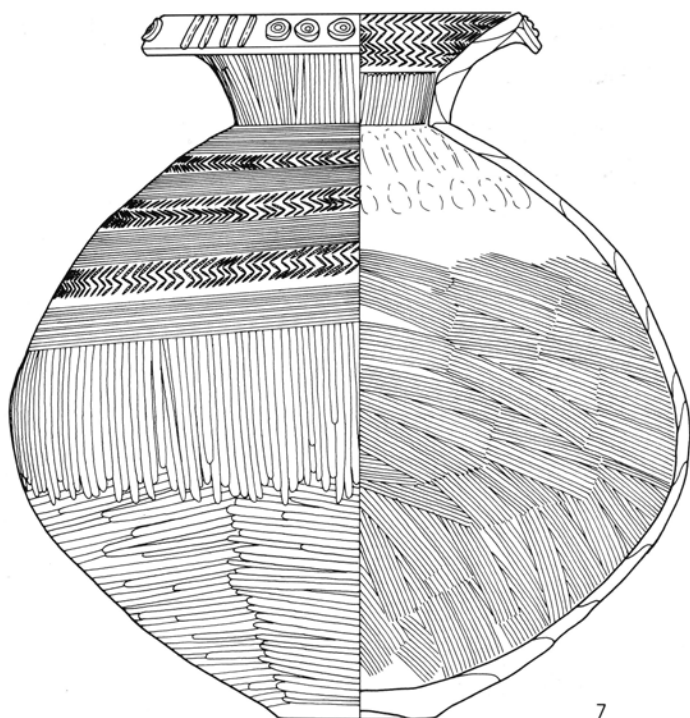
6



4



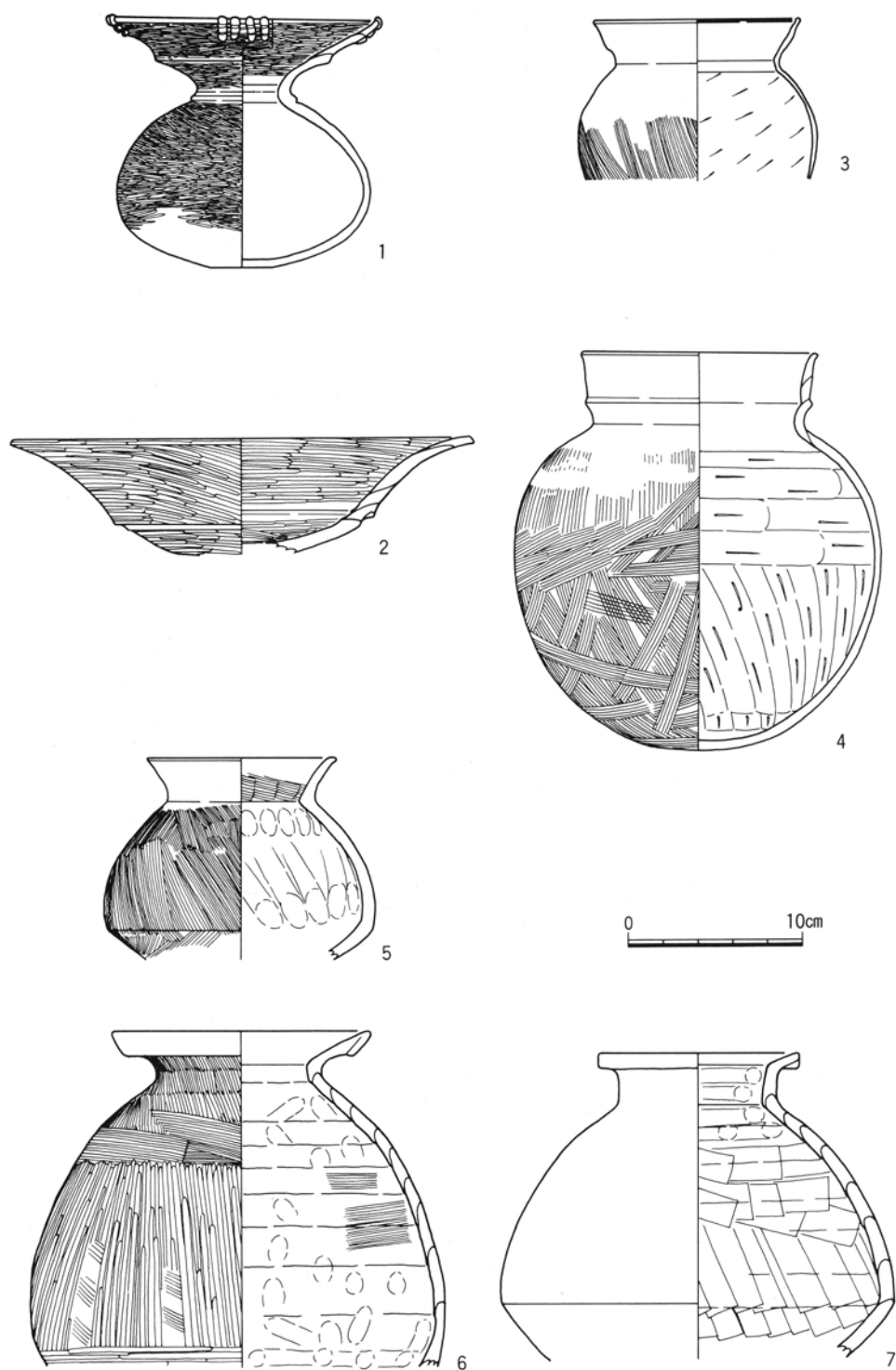
5



7

0 10cm

第4図 朝日遺跡出土の外来系土器(VI期後半)



第5図 朝日遺跡出土の外来系土器(Ⅶ～Ⅷ期)

図版番号	地区・層位	法 量 (cm)	口 頸 部	体 部	底部(脚部)	色 調・胎 土	残 存 度
第1図 1	61D SD03上層	口径15.7、器高 (19.8) 最大径(16.7)、 器厚0.6	外—ヨコナデ 内—ヨコナデ	外—タタキ後ハ ケ 内—ハケヌナデ	外—ナデ 内—ハケ	淡橙褐色 1~2mmの砂粒 を含む	1/12以下
" 2	61D SD03上層	口径16.1 器高 14.3 底 径 15 器 厚 0.4~0.6	外—ナデ 内—ヘラミガキ	外—ヘラミガキ 内—ヘラミガキ	外—ヘラミガキ ・ナデ・透し穴 3 方向 内—ヨコナデ	淡褐色 細かい砂粒・雲 母を含む	口縁・体部4/ 5 脚部欠損
" 3	61J SD02	口径— 器高— 底径13.7 器厚 1.2	—	外—ナデ・ヘラ ミガキ 内—ナデ	外—擬凹線 内—ヨコナデ・ナ デ 底部別粘土貼付	外—丹彩、内— 灰褐色 0.5mmの白色・石 英砂粒を含む	底部のみ
" 4	61J SD02	口径— 器高— 底径12.2 器厚 1.2	—	外—ナデ・ヘラ ミガキ 内—板ナデ	外—擬凹線 内—ヨコナデ・ ナデ 底部別粘土貼付	外—丹彩、内— 灰褐色 1mmの白色砂粒 を含む	底部のみ
" 5	61J SD02	口径19.6 器高 22.8 最大径20.4 器 厚0.5	外—ヨコナデ 内—板ナデ	外—ケズリ・ナ デ 内—板ナデ	別粘土貼付 底部穿孔	淡橙褐色 1mmの白色・黒 色・褐色砂粒を 含む	完形
" 6	61L SZ01	口径18 器高— 最大径25 器厚 0.7	外—ヨコナデ 内—クシ波状、 ヘラミガキ	外—横線後刺突 ハケ・丹彩 内—ユビナデ・ ハケ	—	淡褐色 1mm以下の砂粒 を含む	口縁4/5 体部1/3
" 7	61L SZ01	口径18.7 器高 37.5 最大径35.7 器 厚0.7~1	外—ヨコナデ 後棒状浮文4、 円形浮文4、4対 内—刺突、ヘラ ミガキ	外—横線後刺突、 ヘラミガキ 内—ユビナデ、 ハケ	外—ヘラミガキ 内—ハケ	淡褐色 2~4mmの砂粒 を含む	口縁1/3 体部完形
第2図 1	62I SK01上層	口径15.0 器高 14.3 体部最大径14.4 器厚0.4	外—ヘラミガキ 後棒状浮文4、 4対 内—ヘラミガキ	外—ヘラミガキ 内—ナデ	外—ヘラミガキ 内—ナデ	灰橙色 1~3mm白色・ 黒色・雲母砂粒 を含む	口縁3/4 体部完形
" 2	61U SD02	口径25.9 器高 — 最大径— 器厚 0.7	外—ヘラミガキ 内—ヘラミガキ	外—ヘラミガキ 後屈曲部ナデ、 内—ヘラミガキ 後屈曲部ナデ	—	淡黄褐色 2mmの白色砂粒 わずかに含む	坏部完形
" 3	62I SK01上層	口径11.7 器高 — 最大径13.6 器 厚0.3	外—ヨコナデ 内—ヨコナデ 端部肥厚	外—ハケ 内—ヘラケズリ	—	灰黄色 1~3mmの白色 ・黒色・雲母砂 粒を含む	口縁1/4 体部3/4
" 4	61T SD02	口径13.2 器高 22.3 最大径20.8 器 厚0.4	外—ヨコナデ 内—ヨコナデ	外—細いハケ 内—横位のヘラ ケズリ	外—細いハケ 内—縦位のヘラ ケズリ	淡茶褐色 1mm以下の石英、 3mm以下のチャ ートを含む	全体1/6
" 5	61T SD02	口径10.6 器高 — 最大径15.5 器 厚0.6	外—ヨコナデ 内—ハケ後ヨコ ナデ	外—細いハケ 内—ユビナデ	—	灰白色 0.2mmの白色砂粒 を多く含む	全体1/3
" 6	61T SD02	口径14.5 器高 — 最大径23.6 器 厚0.7	ヨコナデ 粘土折り返し	外—ハケ後ヘラ ミガキ 内—ユビナデ	—	赤褐色 3mm以下の白色 砂粒をわずかに 含む	体部のみ
" 7	61T SD02	口径11.4 器高 — 最大径22.4 器 厚0.8	ヨコナデ 粘土貼付	外—ハケ後ナデ 内—板ナデ	—	淡褐色 0.1~0.5mmの石 英砂粒を多く含 む	口縁2/3 体部1/3

第1表 土器観察表